



【第2号】2006年2月7日発行

【発行】柏書房株式会社
〒113-0021 東京都文京区
本駒込 1-13-14
☎03-3947-8251 (代表)
〈題字〉林英夫

非売品

※古文書を広めて三十余年

経験から語る

上達の極意

「古文書かわら板」第二号をお届けします。創刊号の反響は予想以上に大きく、図書館や公民館などの公共機関や読者の方々から、「もっと送って欲しい」という、うれしいお便りやお電話をいただきました。

第二号の巻頭対談は、日本で初めてカルチャーセンターで古文書講座を開かれた林英夫先生と北原進先生をお招きし、古文書を愛好する方々、これから古文書の学習を始め

ようという方々へのメッセージなどをいただきました。

(司会・編集部小代渉)

※上達する人・上達しない人

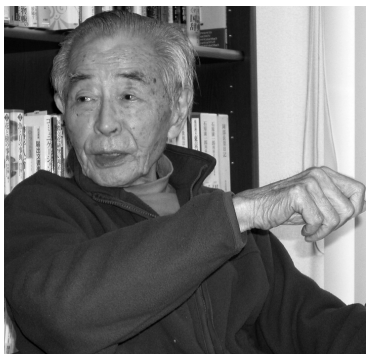
——読者からの葉書に、「なかなか上達しない」「どうしたらスムーズにステップアップできるのか」というメッセージがよく書かれています。入門・初級レベルからなかなか先に進んでいけない方が多いように思いますが。

林——これは古文書だけの問題ではありませんが、まず何かを学習するにあたっては、目的意識を持っているか持っていないかが、そのまま上達するしないに反映してくると思います。

北原——そうですね。

林——古文書であれば、例えば自分の家に先祖が書いたものが残されていて、それを読めるようになりたいという気持ちがあるまま目的となっていく、別に江戸時代のものでなくても

目的意識を持って学習すれば、 古文書を読む 力がついていきます（林）



林英夫（はやし・ひでお）
—— 1919年愛知県生まれ。立教大学
文学部史学科卒業。立教大学名誉教授。
数多くの自治体史編纂委員や、地方史
研究協議会会長なども歴任。現在、朝
日カルチャーセンター新宿校、横浜校
などで古文書講師を務めている。

よくて、明治・大正・昭和初期、いずれの時代
のものでも構わないです。くずし字はこの間も
ずっと使われていましたから。

古文書を読む

北原——自分が生まれ育った地域、あるいは現在

住んでいる地域の歴史を調べたい、という目的
もありますね。郷土のことに關しては大学の研
究者よりも詳しい方々が全国にはたくさんいま
す。とにかく、「調べたい」とか「読めるよう
になりたい」など、積極的な気持ちはどこかに
ある方は上達するのが早いと思います。

また、「読めなくてくやしい」という気持ち
を持てるかどうか、学習を持続させるための
大事な力となりますね。

林——しかし、ここが肝心なのですが、「くず
し字が読めるようになりたい」ということで、
文字だけにこだわって、古文書を読もうとする
とダメですね。とにかく、上達を目指すのであ

れば、古文書に書かれている文字そのものではなく、内容に興味を持つことが大切でしょう。史料集などに活字化されていない古文書が、全国にはたくさんあります。それこそ史料集に掲載されているのはほんの一部にすぎません。古文書一点一点には、有名無名に関わらず、その時代を生きた人々の歴史が刻み込まれているのですから、古文書を手掛かりにして歴史に立ち会うことができるのです。もしかしたら、皆さんの家に残されている古文書には歴史の新発見が書かれているかもしれませんよ。

北原——ある程度古文書が読めるようになってくると、読めたことだけで満足してしまう方もくずし字が読めたことだけに満足しないで、さらに一歩歴史の世界へ踏み込んで欲しい（北原）

います。それではちょっともったいない。実は、その「読めた」と満足してしまうことで、成長が止まってしまいがちです。古文書は、くずし字を読むことだけではなく、ぜひ歴史のなかにまで一歩踏み込んで考えてみたいですね。

◆はじめてのカルチャー講座

——先生方は、日本で最初にカルチャーセンターで古文書講座を催されたのではないかと思いますが、はじめはどのような感じだったのですか。

林——私は、一九七三年（昭和四八）から朝日カルチャーで教え始めていますので、もう三三年になります。

一般の方々が古文書を読めるようにしなければならぬと考へ、講師を引き受けました（林）

北原——もうそんなになるんですね。

林——実は、最初に講師の依頼があつたときには、大学の講義なども忙しかつたので断つたのです。しかし、ちょうどそんな折に考古学の先生とお会いする機会があつて、いっしょに発掘現場に同行しました。そこで彼が説明している内容のレベルの高さに正直驚いたのです。考古学の世界では、研究者だけでなく一般の方々も発掘作業に従事していることが多いですよ。

北原——確かにそうです。

林——研究者が一般の方々と直接指導して、彼らの裾野を広げていく。参加している人たちは実に楽しそうでした。研究者と情報や知識、経

験を共有することで、より考古学に対する裾野も広がっていくわけです。私はその時「ハッ」と気付いたのです。地方史の裾野を広げていくためには、自分自身が率先して、一般の方々が古文書を読めるようにしなければならぬと。そこで、思いを新たにして講師を引き受けるところにしたのです。

北原——私のスタートは、林先生が新宿でカルチャーを開かれてから一年半後くらいでしょうか。一九七四年に池袋のコミュニテイ・カレッジから依頼を受けまして、それ以来続けています。かれこれ三〇年以上になりますね。新宿の林先生のところは受講者が多いのに、池袋の私のところは少ない、などと比較されましたよ



北原進（きたはら・すすむ）

——1934年東京都生まれ。立正大学大学院修了。江戸東京博物館教授などを経て、立正大学名誉教授。現在、池袋コミュニティ・カレッジ、読売・日本テレビ文化センター錦糸町校などで古文書講師を務めている。

（笑）。テキストも手作り、昔はコピー機の性能も悪かったので、準備が大変でした。今は本当に便利になりましたね。

——先生方が長年にわたって裾野を広げていってくださったおかげで、現在では、古文書学習者の人口は確実に増えていっていると実感します。

北原——大学を出て研究者になる道ではなく、古文書講座に出て、古文書をかかなりの程度マスターして、在野のまま調査・研究活動をされている方が増えているように思います。

林——確かに、最近の歴史系雑誌、とくに『地方史研究』などを読むと、その傾向は見られま すね。なかには歴史小説を執筆したり、コッコツと研究されてきた成果を学術研究書として出版されている方もいます。私の受講生のなかには、著名な作家の方が数人いましたし、大学の研究者になった方もいました。特殊事例と言っ てしまえばそれまでですが、専門家であればこそ、原典を読むこと、原典に触れることの大切 さが必要なのだと思います。

——普段はどのようにして講座を進めているのですか。また、どのようなテキストを使っているのですか。

私が読めない字が出てきた時には、受講生が救いの手を差し伸べてくれます（北原）

林——私は予習をしていきません（笑）。講座

のその場で史料を渡して、それをいきなり読んでいきます。だいたい五〇人くらいの受講生がいますが、二〇〜三〇人は私よりもずっと読めますから助かります（笑）。私の講座を二〇年以上も受講している方が何人もいますから。読めない字が出てきた時には、「〇〇さん、何だと思う？」って聞いてしまいますよ。逆にそれが教室の一体感につながることもあります。テキストはとくに江戸時代のものにこだわらず、明治や昭和初期のものまで幅広く使っています。北原——私も時間的に準備が間に合わない時などは、ぶっつけ本番でやっています。そんな時に

限って、読んでいて引っ掛かる字が出てくるんですよ。でも、林先生と同じで、長年受講されて

いる方々が「先生、こうじゃないですか」と、救いの手を差し伸べてくれます（笑）。私は江戸の町方史料や地方史料がテキストの中心ですが、基本的には何でも構わないですね。

——先生でも読めない字があるんだ、自分だけが分からないわけではないんだ、と受講生の方は安心しますね。

❖自分で課題を持って

——これから古文書を、という方に何かアドバイスを願います。

林——自分に対して、古文書に興味を持たせてくれる講師や仲間に出会うことができれば一番

よいのですが。現在では多くの自治体で古文書講座が催されていますし、カルチャーセンターもあります。通信講座もあり、古文書の入門書もたくさん出ていて、昔に比べれば古文書と接する機会が格段に増えています。冒頭でお話したことの繰り返しになってしましますが、とにかく、自分で課題を決めてから学習を始められることが大事です。例えば、自宅に古文書が残っている方であれば、先祖の名前の変遷をたどって家系図を作ったり、郷土に残る古文書を使って、町や村の役人の名前、領主の名前の変遷などを調べてまとめてみるということもテーマとなりますね。自分の家にある掛け軸の文字が読

めるようになりたい、というテーマだってあるわけです。

北原——読めるようになるほど古文書は楽しくなります。さらに自分のテーマを持って学習に臨んでくだされば、講師としても、「こんな調べ方もある」とか、「こんな史料もある」などと、サポートすることができますし、こちらにも刺激をもらって、いっしょに勉強ができます。長年やっていますと、受講生の方々から教えられることがたくさんあります。古文書の解読は奥が深いので、ゆっくりとあせらずに、じっくり取り組まれるのがよいでしょう。

——本日は長い時間、どうもありがとうございました。

(二〇〇六年一月一八日／柏書房会議室にて)

古文書と接する機会が、

昔とは比べ物にならないくらい充実しています(林)

私の古文書学習法

——五十の手習いから処女出版まで

吉田豊

Yoshida Yutaka

✧五十からの手習い

林美一先生著『江戸戯作文庫』（十巻・河出書房新社）の第一巻が刊行された一九八四（昭和五九）年が、私の古文書学習の始まりです。すでに五一歳になっていましたが、子ども時分の、草双紙の絵をながめて過ごした懐かしさから、かな読みに挑戦しました。原文と解説文を一字ずつ照合しながらかなを覚えてゆき、遠慮も知らず先生に質問を続けた末、次第に仕事のお手伝いをするようになりました。例えば、(株)電通が企画した広告資料の収集や展示会に参画したり、また先生の

著作『浮世絵春画名品集成』（河出書房新社）の解説をお手伝いしたことなどです。

こうして版本に接する機会が深まるにつれて、骨董市や古書市を通じて草双紙や往来物などを集め出すことになりました。また、一九八九年にはNHK学園の古文書通信講座に第一期生として入学し、十年ほど継続して古文書にも慣れてきましたので、奮発した結果、一級インストラクターに合格することが出来ました。

定年後に参加した地域の歴史研究会で、版本を読む勉強を始めることになり、初の教師体験をし

ました。作成した教材がかなりの量になったので、これを自費出版して生涯の記念にしようと思いい立ち、どうせ出すなら古文書に力を入れていようと思いい出版社から出そうと、いきなり柏書房に飛び込んで見積もりを依頼しました。すると意外にも、商品にしませんかと提案を受け、処女出版『江戸かな古文書入門』が出来たのです。

◆寺子屋式の学習法

私が古文書を読めるようになったのは、かな読みから学習を開始したおかげとっております。かなを読むために版本を買い集めたのであって、蒐集の趣味からではありません。

庶民向けの版本はふりがな付きですから、楽しみながらも、ふりがなを頼りに草書体のくずし字が読めるようになってゆきました。

かなを覚え、次に往来物といわれる版本の教科

書で読み書きを身に付けるやり方は、まさに寺子屋の学習法そのものです。

『江戸かな古文書入門』が増刷となる旨の通知を受けたときは、正直、びっくりしましたが、世の中になかな読みの需要があるらしいと感じてきて、次になかな読みから始まる古文書入門書を出すことになりました。

五十歳から始まった自分の学習経験を、そのまま本にまとめたものですが、おかげさまで『江戸かな古文書入門』は現在七刷、『寺子屋式古文書入門』は九刷に達しています。生涯学習の教室での講座も担当するようになりました。とは言え、私の庶民レベルの能力では難しい文書は読めません。古文書の入門段階を担当するのが私の役目と信じております。

(よしだ・ゆたか)

本物の古文書を手にとってみることができる公共機関

❖北海道立文書館

所在地▼札幌市中央区北3条西6丁目

電話▼011(204)5077

交通▼札幌市営地下鉄さっぽろ駅下車徒歩5分、JR札幌駅・地下鉄大通駅下車徒歩10分。

北海道の歴史に関する文書や記録の収集のため、昭和六〇年に設立されました。箱館奉行所や開拓使に関する古文書、道庁の公文書、古記録・地図など二六万点余を所蔵しています。利用方法 閲覧室に備え付けの目録で閲覧したい史料を特定し、係員に請求してください。マイクロフィルム化されている史料は複写が可能です。また、所定の手続きをすれば写真撮影もできます。

❖千葉県文書館

所在地▼千葉市中央区中央4-15-7

電話▼043(227)7551

交通▼モノレール県庁前駅より徒歩3分、JR千葉駅よりバス、県庁前下車、徒歩3分

房総の歴史や伝統を記した古文書四二万点余を収蔵し、整理が終了した一六万点余の閲覧が可能です。佐倉藩堀田家文書など館外に所在する県内関係の史料はマイクロフィルムで所蔵し、また、明治以降の行政文書も収蔵。展示室もあります。利用方法 閲覧室（4階）に配架の目録から史料を特定し、受付へ請求してください。マイクロフィルム化されている史料は複写が可能です。

❖新潟県立文書館

所在地▼新潟市女池南3-1-2

電話▼025(284)6011

交通▼JR新潟駅よりバス、野球場・科学館

前下車、徒歩8分

貴重な歴史資料を未来に引き継ぐことを目的に、平成四年に開館しました。県行政の公文書や越後・佐渡に関する古文書など、三五万点余の文書を所蔵しています。インターネット上で古文書講座も開催しています (<http://www.lalanet.gr.jp>)

利用方法 閲覧室備えつけの目録・カードで文書を特定し、申請書により請求してください。原則、複写は可能ですが、原本の電子コピーは出来ません。

❖山口県文書館

所在地▼山口市後河原150-1

電話▼083(924)2116

交通▼JR山口駅下車、徒歩20分、JR新山

口駅よりバス、県庁前下車、徒歩10分

明治維新の中核を担った長州萩藩の毛利家文庫や徳山毛利家文庫、県庁伝来旧藩記録などの藩政文書、明治以降の山口県の行政に関する文書、県内各地の諸家に伝わった文書など、四四万点を所蔵しています。毎年四月から古文書講座を開催しています。

利用方法 備えつけの目録で史料を特定し、「閲覧票」に記入のうえ、閲覧室受付に提出してください。複写サービスは行なっていませんが、「複写承認申請書」を提出すれば写真撮影ができます。

寺子屋検定クイズ 正しいのはどっち？

古文書を読んでいると、くずし方の似ている文字がたくさん出てきます。ここでは、全体が似ている文字や、偏や旁が似ている文字などを取り上げてみました。なかなか手ごわいですよ。

問1 「来」はどっち？

① 

② 

()

問3 「頼」はどっち？

① 

② 

()

問2 「行」はどっち？

① 

② 

()

問4 「守」はどっち？

① 

② 

()

問5 「折」はどっち?

① ②

問6 「手」が入っているのはどっち?

① ②

問8 「しんにょう」の文字はどっち?

① ②

問9 「したごころ」の文字はどっち?

① ②

問7 「ぎょうにんべん」の文字はどっち?

① ②

問10 活字に直した時の画数が多いのはどっち?

① ②

◎ ②01画、①6画、②8画、②7画、②9画、①5画、②4画、①3画、①2画、②1画

◆書店と古文書講座

菊竹金文堂福岡支店「りーぶる天神」 都渡正道

りーぶる天神

所在地▼福岡市中央区天神4-4-11 福岡

シヨップパースプラザ六階

交通▼福岡市営地下鉄天神駅下車、徒歩5分

西鉄天神駅下車、徒歩7分

電話▼092(713)1001

柏書房では、昨年一〇月二日に、福岡市の書店「りーぶる天神」を皮切りとして、同月三〇日には東京・神保町の三省堂書店神田本店で、油井宏子先生を講師とした古文書講座を開催いたしました。本年は、二月に長野市の平安堂、三月に東京・池袋のジュンク堂書店、四月に盛岡市の東山堂におきまして、油井先生の古文書講座を開催する予定であります。

はや21世紀に入って6年目となった。社会は勝ち組、負け組 弱肉強食 アメリカ型等と言われ、確かに競争社会に突入しており我々は能力を磨かなければならなくなった。

それも時代の流れで我々はそれに適応しなければならぬ。ただ単に一生懸命にやっているだけでは厳しい、難しい時代に入ったものだ。

しかしながら、今の社会を鳥瞰してみると、凶悪犯罪の横行、スピード時代への対策不足、はたまた、学力低下やニート等の増加などなど将来的に問題は山積しているように思う。

そんな中で、我々は表面的な事項のみに捉われ

る事なく、内面的なものに対しての強化を計って
いかなければならないような気がする。そこで登
場するのが「文化」であろう。文化の定義はさて
おいて、文化を最も大事にしていくのは書店でな
ければならないというのが、私の持論ではある。

そこで、書店の役割として、本を物として扱う
のではなく、もっと中身の問題を捉える事が必要
ではないのかということになってくるのだが、如
何せん能力の問題もありどうしても一部に限られ
てくる。今後も顧客ニーズを考えると、生涯学習、
定年後の研究テーマ、仲間作り等など色々と中身
の問題を研究していかねばならない。私も団塊の
世代の一人として興味がある。

そこで、前々から気になっていた「古文書講座」
の事を、ある会合で柏書房の富澤社長にお話した
ところ、心良く了解くださり、地方の書店であり

ながら開催できたのであった。

最初はどこにアプローチすればより多くの集客
が出来るか？ 会場と費用と効果の問題など悩ん
だものだが、講師の油井宏子先生とお会いして、
先生の人柄に共感を覚え、はじめて開催した講座
も何とか無事に終了できた。

参加者の皆様と柏書房の関係者に感謝いたして
おります。

次回は久留米図書館とタイアップしてもっと多
くの方に「古文書の魅力」を知って頂けるよう、
さらに努力したいと願っております。

最後に、地方の書店で、規模の大小とか関係無
く、このような催しにチャレンジしていただきた
い。大都市圏ではもっと頻繁に開催されていいの
ではないでしょうか。

(株)菊竹金文堂・代表取締役社長)

油井宏子先生の古文書講座に 出席して

柏書房 名塚通孝

実際のくずし字を目の前にして、同じ日本人が書いた文字なのにどうしてスムーズに解読できないのだろうかという歯がゆい思いがあつて、それを少しでも克服したいと、油井先生の講座に臨んだ。あつという間の2時間だったが、終わってみれば先生の解説が無くても再読できたのには驚いた。難解とも思えるくずし字の基本は、出現頻度の高い文字のくずし方を覚えてしまうことにあるという。古文書はそうした頻出する文字の解読がポイントとなる。のた打ち回っているような文字でも、先に覚えた文字を手掛かりにしていくことで、不思議なことに全体像がつかめるようになる

のだ。油井先生の講座の特長はそれだけに留まらない。当時の時代背景や心理状況を丹念に調べてコラムのように説明してくれるため、頭のなかで、テキストに登場する江戸時代の人物がまるでドラマのように動き出す。もやもやと書きとめている解読文も、先生と一緒に朗読するので、眼に耳に古文書が吸収できるのだ。自分はたった1回の講座しか参加していないけれど、これだけは忘れないというくずし字が記憶に刻みつけられている。先生が熱く語っていらした「歴史に関わることの楽しさ」を経験・体感できた時間だった。こうした講座が全国に広がって、読者の方が日本人であることに大いに誇りを持ち、大いに歴史の面白さを実感してもらいたいと切実に願う。